

米澤彰純委員 意見書

【グローバル化の中での愛知の地域づくりの方向性について】

- 愛知県の特性として、地元で家族がいて、地元の大学に進学し、地元企業に就職して、その中で人が育っていくという、ある種の共同体のような文化があり、それは当地の強みや魅力でもある。一方で、これからは個人が強くなっては生き残れない時代でもある。地元を大切にするという文化を生かしながらも、保守的な面を打破して、多様な人を受け入れるような風土・社会づくりが求められている。それは愛知の実情にあっているのではないか。
- その際、製造業を中心とした当地の課題として、景気動向に応じて、様々な時期に、様々な国から期間工のような立場で外国人が流入してきていることがある。彼らが母国に帰りたくなった時に、帰りやすいということが大切である。また、外国人労働者の集住は地域住民との摩擦を生むこともあり、ネガティブな方向に進みがちである。そうならない形で、入ってきやすく、出て行きやすい、また、ずっと住み続けたい人は定住できるという地域づくりが課題である。
- そのためには、外国人労働者の家族へのサポートが必要である。地域レベルでは、ボランティアを主体とした日本語教室や子どもに対する学習支援活動が行われているし、外国人労働者の子弟が母国語で学べ、母国に帰る際にも役立つ教育を行う地域学校のような取組が行われている。こうした活動は重要である。ただし、福祉の側面で行われているのが現状であり、愛知の産業を支える人材育成にはつながらない点では課題がある。

【産業を支える人づくりについて】

- 愛知は製造業を中心とした産業が強く、日本の他の地方中核都市のように、産業人口がより規模の大きい都市圏に吸収されたり、それに伴い大学が大規模な学生需要の減少に見舞われることは今までなかったが、今後ずっとそうであるとは限らない。製造業は、ある程度の集団や蓄積が必要な産業であり、外から人を持ってくるといっても、人を育てるという要素が高いので、愛知は産業を支える人づくりをどこよりも頑張らなくてはならない。
- 現在の教育は、産業経済面でみると、社会のニーズに追いついていないのが実情である。産業界からも積極的にこれからの社会に必要な人材像について発信してもらい、行政には、人が幸せになる方向で産業と教育が結

び付くように、産業界と教育界をつなげていくことが求められる。

- 大学は、産業界から国際的に通用する人材の育成を求められているが、大学側から見ると、入学時点において、英語力など国際的な力が不足していると感じる。また、この地域の大学は高い研究能力を持っているが、学生側が追いついてきていない面がある。その理由は、東京と比較すると、この地域の学生は、地元就職先があったり、地域が豊かなこともあってモチベーションが十分でないからではないか。地元志向が強い地域であり、地域の中で人材を育てていくのであれば、グローバル人材や高度人材などの必要性について、高校と大学が連携し、将来を見据えた教育を進めていくことが必要である。
- これからの産業を考えた場合、系列に頼らないでも勝ち残っていけるような企業が数多くあることも大切である。陶磁器や繊維関係など商店街に立地しているような小さな企業でも、インターネットを使って幅広い顧客を相手に商売をしているところもある。こうした強い中小企業を担うアントレプレナーシップを育むような教育も必要である。

【グローバル人材の育成について】

- 国際バカロレア（国際的に通用する大学入学資格を付与する仕組み）に沿ったカリキュラムは、日本の学習指導要領に沿ったカリキュラムの片手間で実践できる質や量ではない。そのため、国際バカロレアにするか、日本の学習指導要領に沿った教育にするかを選ばなければならなくなるが、現実には、国際バカロレアの修了者が日本の大学へ進学できる受け皿が整っていない点に課題がある。名古屋大学は文部科学省の「グローバル 30」に採択されており、日本人を含め、インターナショナルスクールの卒業生を受け入れる枠組みがある。県として国際バカロレアを進めるのであれば、修了者が進学できる枠を設定できるよう県内の大学へ働きかけたり、高校と大学とが一貫してカリキュラムを実践するなど、高校と大学のつながりを持たせる仕組みが必要である。
- スーパーイングリッシュハブスクールの取組は、日本の学習指導要領の中で、英語での実践的なコミュニケーションスキルを高めるものであり、こちらの方が現状では主流になると思われる。ただし、国際バカロレアの修了者も同様であるが、大学進学後も、学んだことを生かし、発展させるような大学側の取組が必要であり、行政も後押しをしてほしい。

【高度外国人人材の獲得について】

- 優秀な外国人を地域に呼び込むのであれば、外国の大学を誘致することが考えられるが、人口減少が進む日本では、学生を獲得する市場としての魅力がなく、現実的には難しい。愛知県では、地元の産業界と連携して人材育成に取り組み、人を呼び込むような形が現実的な選択肢ではないか。また、シカゴキャンパスを持っている豊田工業大学のように、県内の大学が持っている外国とのつながりを生かすことも、一つの手法として考えられる。

【グローバル化の中での農業について】

- 農業は国際的な産業でもある。名古屋大学の農学国際協力研究センターのように、県内の大学は農学分野でも国際協力等で海外とのつながりを持っている。産業としての農業を考えた場合に、こうしたつながりを活用していくことができるのではないか。
- 貿易の自由化が進めば、国内農業が、いかに大規模化・効率化していくかが鍵となり、大学等の研究機能を生かしていくことも必要である。また、生産技術や品種開発を国内で行って、海外で生産を行い、日本への逆輸入も含め、ビジネスとして成立させるということも考えられるのではないか。開発途上国の農業は、大地主が土地を所有し、大規模化しているところが多い。その点では企業化が進みやすいということもある。

【その他（ビジョン全般について）】

- ビジョン全体を通じて、もう少し勢いがあってもよいのではないか。現在の施策からもう一步突っ込んで、さらに何ができるのかを考えて欲しい。また、教育や人づくりが様々なところに出てくるが、全体としてどのように結びつけていくのか工夫が必要であるし、全般的に人材育成に関する危機感が足りないように感じる。また、人口減少への対応についても、答えが必要ではないか。